

花の咲く山

むかし、きれいな花がたくさん咲く山がありました。その山を、中腹にそびえ立つ大きな木が見まもっていました。

山からながれでる谷にそって、ふもとの方から少しずつ人々が住みつきました。とうとう谷のいちばんおくにも小さな小屋がたちました。住んだのは若いおとうさんとおかあさん、まだ赤ん坊の男の子の三人でした。

おとうさんとおかあさんは力をあわせて山の木を切りたおし、畑をつくってイモややさいをそだてました。おとうさんが谷でつった魚や畑の作物をたべ男の子はすぐ育ちました。

谷の中ほどにはお店や学校ができました。三時間もかけて学校へ往復し、たくましい若者に成長した男の子は、おとうさんを助けて畑をひろげました。

「あの大きな木を切りたおすと畑をもっとひろげられるね」

「それはいけない。あの木は大切にしなくては」

「どうしてなの。畑をつくるのに、ちょうどよい場所なのに」

「わたしたちは、生きるために少し山をこわして畑にさせてもらっているが、用がすめば山に返さにゃならん。あの木はもう何百年もこの山で生きてきて、いまでは山の一部分だ。あれを切ってしまったらもとの山にもどせなくなるからな」

「畑はずっと使うよ。用がすんで山に返すなんてことはないよ」

「人にはうんと先のことなどわからない。わからないから、いつでももどせるようにしておくのがいいんだよ。自然にもともとあったものをこわしたままでいい、なんてことは決してないんだ」

若者には父のことばの意味がよくわかりませんでした。でも、わからないままに心にのこりました。谷に車が通るようになり、朝早くとりいれたやさいをいちばんバスで村へ運べるようになりました。

長い月日がすぎ、若者は男の子の父になり、親子で畑をたがやしながら亡くなった父親のことばを話して聞かせました。話がよくわからないままでも、その言葉を心にとどめた子どもは、親になると同じように畑をまもるわが子につたえました。そのころには軽トラックで町へ運んでいたやさいは、新鮮さでとぶようにうれました。

さらに長い年月がすぎました。谷の暮らしをすて便利な町へうつる人がふえました。若者たちは町の学校へ行くとそのままもどらなくなりました。空き家がどんどんふえました。大きな木はそれをじっと見ていました。

ある夜、谷のいちばんおくの家でこんなことばがかわされていました。

「さびしくなったねえ。人が出ていって、学校もお店も、バスも、乗合いタクシーもなくなった。この谷おくにのこったのはわれわれふたりだけだなあ」

「おたがいに年をとつて畠も作れなくなつたし…」

「いよいよ、じゃないかな」

「そうですね。いよいよその時がきたようですね」

次の日からふたりは畠の作物をひきぬき、斜面にそつて上、中、下とならんだ畠をきれいにとのえました。それから、ふたりが大好きな桃の木の苗を植えました。

「何年もすれば花ざかりになるさ。もとはきれいな花の咲く山だったそうだから、うんときれいにどしたい。おせわになったお返しなんだから」

「花ざかりの山になれば、また人が訪ねてくれるかもしれませんね」

中の畠のなかばまで植えたところで、おじいさんは亡くなりました。ひとりになったおばあさんは桃の木を植えつけました。下の畠まで植え終えたおばあさんも、花ざかりを見ることなく亡くなりました。

谷のおくに誰もいなくなつて長い長い年月がすぎました。

やがて、まわりの町や村をあわせて大きな市がうまれ、そのなかに花の咲く山もとりこまれました。

市長さんが係りの人にいいました。

「人があつまる勢いのある市にしたい。誰もが喜びそうな場所をさがしてほしい」

あちこちとびまわった係りの人は、にこにこして市長さんに報告しました。

「すてきな場所を見つけました。花ざかりの森です。桃の花があたりいちめんに咲き乱れています。千年も生きたような大きな木もあります」

さっそく道路が作られ、谷おくに大きな駐車場ができ、「花ざかりの森」と書かれた高さ三メートルの石碑がたてられました。やがて、花の咲く山は、春には人とゴミがあふれる山にかわってゆきました。

大きな木は、それをじっと見ていました。